
ハナノナノ（未定） 2

希羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハナノナノ（未定） 2

【Nコード】

N9264U

【作者名】

希羽

【あらすじ】

ちよつとバイト行かなきゃで急ぎ足で仕上げました。でも早くお届けしたくて！ あ、立て読み推奨です！

（前書き）

こちらでも縦書きで読んでいただけると嬉しいです。
それ用に書いていますので。

乳白色のカーテンが大仰に羽ばたいた。

左半身が冷房の弱風に舐められ、薄着で来たことを嘆く。

ここは、校内にいくつかあるらしい保健室のひとつ。

僕は四本足の丸椅子に腰かけながら、呼び出し人を長らく待つて
いるのだった。

「なげえよ」

漏らす。

既に、時計の長針が半周走を終えている。「残り半周だ！頑張れ
！」などと観戦するのは気が引ける。とんだ延長戦だが、残念、こ
こはサッカーグラウンドではないので、全てロスタイムでしかない。
向かって右手に見えるのは、ずらりと並んだ同じ型のベット。左
手には薬品類やらの陳列と、事務仕事に似つかわしい机。開きっぱ
なしの窓は奥に。

保険医は無責任にも不在だった。

室内は清楚な内装で、消毒液の臭いが鼻をつく。

クーラーはガンガンで窓全開の、異様な部屋の内部。

窓際から流れ来る春の温もりと、頭上から溢れる患者への思いや
り。環境保護と快適生活を測りにかけたせめぎ合いが、安眠を妨げ
ない音量で耳をくすぐる、そんな夕前。

動く人影は一つもなく、静観。

チリンチリン

そう、ときどき時期尚早の風鈴が窓際で高音を響かせた。

白衣の天使は、優劣つけ難い論議に目をつぶりたいのか、参加し
てくれない意向を示す。代わりに、「はだけた制服姿の女子高生で

も覗きに行きたい」などとさつきから頭上の悪魔がうるさくてかわない。

どちらも、時間潰しの妄想だけだ。

奥のベットの上で、寝息を立てている七恵結（確定）。

百メートル近く担^{かう}いで運ぶ^はにしては軽すぎる、そんな彼女の容態は、貧血と診断され、疑われる余地は今のところない。

途中から同行してくれた教員に「ダイエットのための偏食では？」とありきたりな憶測で同意を求められても、見たものをそのまま話せばベットの予約が一つ増えそうなので、適当に話を合わせた。

偏食というワードから浮かぶ嫌な予感的中しくとも、あの晴天下を小食の女子が全力疾走すれば、特に異常な事態ではないだろう。

「さすがに三食花つてことは……ないよな」

頭だけでなく、お腹の中までお花畑では前途多難だ。素直に大地の上でのみ、園芸に励んで欲しい。

不本意な配達業務の報酬に、疲労感と他人の目をたくさん頂いた後、午後の授業にいったん戻った僕は、帰りのホームルーム中に放送で再びこの保健室へと呼び出されたのだった。

呼び出される理由がいまいちわからないので、いろいろと懸念しながら向かってみるも、残念なことにこのザマ。

「あれ、”この棟の”保健室じゃなかったかな？」

複数の保健室が分布する本校に限り、可能性が見え隠れするものの、実際に郵送した急患がいらっしゃるのでここ間違いないだろう。いつまでも、運動部見学を所望する生徒は、不動で時間を潰すことしかできなかった。

大自然に喧嘩を売る電化製品に背を向け、溜息を一つ。

視界をシャットダウンし、脳の隅っこでまぬけに踊る切なさへと、スポットライトを当てることにする。

昼休みの小旅行のことが、まだ頭から離れない。

議題、二年の歳月が想い人を他人に格下げしてくれた件に関して。

感想、心臓に釘五本。

とはいえ、現実にはそれほど年月が経てばお互いによそよしくなることなど、日常茶飯事とも思う。道で出くわしても、挨拶ひとつ返さない無礼な旧友もいるのだから、ごく一般的な事象だ。

親しい中から礼儀が抜けると、関係は破綻しかねないという教訓かもしれないな。自分のことだった、ごめんなさい。

そう考えているうちに、また鈴の音を聴く。

ましてや、相手もまた、恋を患う重症な患者のはず。

「いや…」

無意味にテンポを刻む指が静止した。

前のめりになり、膝に肘を置く。

結先輩が、今も同じ糞野郎に唆そそのかされて、感受性を蝕むしまれているとは限らない。

主観的認識を偏見でアレンジして解釈しても、それは十分、現実の範疇はんちゆうだ。

もし関係が継続中なら、煮えくりかえった腹の底から、血の涙を添えて呪ののきたい。間違えた、祝いのちいたい。

それでも古いにしえより、千年の恋も容易いことで覚めるのが乙女心だと聞く。

ならば、遅ればせながら上にも下にも少年の心を忍ばせて強引に恋愛に励めば…、励めば…。

白を基調とした視界がひらける。

「どうでもいい」

自分の中にある想いが、恋とか愛とか、もはやそういうものではない気がした。

でき上った感情ではない。

透明な箱の中に、様々な色や形の欠片が散らばり、ことあるごとに箱が揺れ、一つの何かになりかけては、またばらけてしてしまう。尖ったものができかけて突き刺さったり、丸いものができ損じて優しく触れたり、濡れていたり、砂のようだったり。

彼女は僕の全て、ではなかった。

ただの、僕の一部だった。

その一片を失った後に手のひらを眺めると、思ったよりもずっと弱々しく見えることを、僕は知ってる。

大き過ぎない苦しみ。自覚できない程度の、心の欠損。

僕の全てが彼女ではないし、彼女の全てが誰でもない。

誰かの全てが何かで在ったことなんて、ないのだから。

だから、「こんな再会いらなかったのに」

転機は土足で、節操なく、僕を訪れた。

失くしたものを取り戻せ、とでも言わんばかりに。

選択を強要され、選んだ答えは意味を成さずに、選択肢はまた与えられた。

でも、次の選択でも僕は”拒絶”を選ぶだろう。

その次も、その次も。

今、僕は、ただ僕を保ちたいだけだ。

あんなことがあったのだから。

「どーん！」

気持ちの整理は、無邪気な悪戯に強制終了を掛けられてしまった。咄嗟とつさのことに、叫ばずに息を止めたものの、肩が大いに上がってしまう。

背中を軽く押され、作戦成功を記念してか、後方で煽あおるような高笑いが上がっている。

恥らしさと混乱で判断力が渋滞し、とりあえず振り向いてみると、白い八重歯と肩を越す長い金髪が目についた。

見覚えのない顔だ。

万が一の確認の意味も込めて、健康的な足まで視察する。やはり見覚えはなかった。見覚えはないのだが、見ていられる分は見ていたい、そんな脚だった。

「せいこー！ふひひ」

この登場にして、この笑い。

初対面の相手に悪意を持たれる為のテクニックには、見習うべき点がいくつもある気がしますよね。

こちらら、自問自答のクイズ大会を邪魔されて、苛立っているというのに。

「なんだよ」

立ち上がると、丸椅子が倒れて僕の気持ちを代弁すべく衝撃音をたてた。

「まあそうおこりなさんなー」

片手をひらひらさせながら、反省の度合いを分かりやすく伝えてくる。

腰を折る方向を逆にして、土下座された気分だ。

「眉間にしわよってるよー」

ニヤリとして人さし指で位置の把握を促してくれるので、会釈でもしようかと一歩下がると、「すきありー」の掛け声と共に脇腹に軽いチョップをお見舞いされる。

追加料金代わりに、せめてもの思いで、遺憾の意を目力という媒介で贈呈すべく試みれば、「またしわよってるう！それって癖だね！」と笑い混じりで効果は無く、今度は両手の指まで使って胡散臭いヨガを披露される。

「…はあ」

願わくば、今後は作法のお手本にしたい限りです、畜生。

起立して対峙すると、案外小柄な女子生徒。

八方美人になるなら、あと六方向分くらいはマスターするべき愛嬌が残っていそう。

何が面白かったのか、しばらくはうずくまって、腹筋の痙攣けいれんを抑え込んでいる。それが持病なら、頼むからこじらせて欲しい、と切に願う。

僕は露骨に悪態づきながら、登場した謎の女子高生を見下ろした。おとなしくしている間に、一刻も早くここから立ち去りたい気持ちでいっぱいになる。

舌打ちを三回。

しかし、それでは呼び出した人物に申し訳が立たないと思いなおして、立ち往生を余儀なくされ、無様に立ち尽くした。

徒然なるままに日暮ひぐらしすずりに向かっていた方がましだ。

でもよく考えると、相手方にもだいたいぶ待たされているので、この女を振りきれたら帰ろうかなとも思えてくる、内心。

「誰だよ」

具体的には、何者だよ。

幸い、日本語が通じる可能性と共に、視線が上がった。

ぱつちりとした二重瞼から放たれる二本の平行線が、こちらの両眼をがつちりととらえて圧倒される。

認めたくないけど、存在感と勢いに圧倒されて面食らっている自分。

「いやー、なんか元気なかったからさあ。あ、私は九重くじゅうね。よろぴっぴ」

こちらの質問へしつかり順番通りに答え、知らない国の挨拶で締めくくられる。

訊いといてなんだが、名乗られても、別段状況は理解できなかった。

それも一時の悩み。次の一言で解消される。

「あんたがゆんを運んできてくれたんでしょ」

「ああ…はい、まあ」

答えて間もなく、前方の女子がここに居る意味を悟る。

この女が、わざわざ僕を校内放送で呼び出して来たのか。目を細める。

「じゃあ、あなたが僕を」

「そだよー」

困惑が迷惑へと色づいた。

結先輩とはどういう関係なのだろうか。

「やたらに遅かったですね」

「そういうタイプなんだもの」

「待ち合わせで、会うことより待たせることを重視するタイプですか？」

「遅れたのはごめんって！。ちょっと忙しいんだよ先輩は」

言い切るのと同じタイミングで、肩をぽんつと叩かれた。

うりうりつとか呟きながら、肘でぐりぐりしてくる。

スキンシップが多いな、この人。物理世界に留まらず、癢いさに触る頻度もまた高いし。文武両道かもしれない。違うか。

未だに新入生は学級委員すら決まっていけない時期なので、とりまく雰囲気から言って同学年でないのは予想通り。

にしても、教員とかが来ると身構えていたのに、とんだ見当違いだ。

「で……なんの用事ですか？」

「なにつて、お礼やお礼。ぶったおれた女の子背負ってくるとかマジ勇者！」

言葉の一つ一つがはつきりと発音され、語尾がいつも早口になる。それって癖だね！

呼び出したわりには、あっけない返答ではないか。

これを機に、お礼の礼の字を、書き順から意味まで、詳しく勉強しなおしてきてくれないかな。

リン

ひとつ、いっとう澄んだ音が窓際から広がる。

「それと、確認」

僕の鼻から喉の震えが漏れた。

もう一人いるとは、それまで気がつかなかったからだ。

落ちつき、湿った葉のような声。水面にひたる新緑を思わせる、密ひそやかなみずみずしさ。

声の方を向くと、所々に銀が織り込まれた金色の屏風の奥に、黒を見た。

垂直に落ちるストレートの髪の間隙から、反らしっ放しの瞳が覗

けた。

「へ、ヘンなことしてないか」

瞬きでウィンカーをかければ、お目当ての二人目は九重さんの中とな。

正しくは、二人目ではなく、表情の陰りといったところか。

人格が横にシフトして、別人に相なったのかと心配し申す。

瞳孔で槍術を繰り出してきた先ほどとは打って変わり、網膜は屏風の影でかくれんぼをしている。

声色の落差に、僕は何が起こったのか掴みかけて息をのんだ。

「な、ふえ？」

唇は、咄嗟に、覚えてたの新言語を吐く。

「え、何？」

低い声をスイッチに、今度は癒し系要素が吹っ飛んだ。

湖畔が一晚にして砂漠になる情景が脳内をまたぐほどの、好感度の下降を感じた。

今のは一体？

「いや、なんでも…」

自覚はないのだろうか。

独り言のようにして、ごによごによと放たれた声は、張りきつたそれとは裏腹に少女の面影をありありと宙に泳がせる。

極端に分かりやすい性格なのか、大げさにし過ぎた演技なのか。それって癖、とかなのかな？

弱々しい方が地声に聞こえたことを、傍若無人という第一印象が邪魔して、うまく消化せずに会話に戻る。

「ヘンなことですか。この国では、痴漢、露出、強盗、監禁、拉致など、ヘンなことが小分けされているためにどれを指しているかによつて、判定を違える必要があるんですが」

などといらぬちよつかいを出した。

まあ、自分が興じた抱擁は、実はプロレス技の応用なので、全然やましい行為ではないはずなだけださ。

「エロいこととかは？」

あまりにも直球。

「身に覚えがないっすね。 気絶した女性にハグとか外道の極みっすよ」

疑いの視線を頬までで遮断し、焦点を適当なところに置いて、目を休める。

「ほんとにい？おんぶするときふともも触ってなかったあ？」

異常に近いところから声がしても、決して逃避からこの目をそらさない。

「触らずしてどうやって背負うんだよ」

抱っこならよかったのだろうか。とても不本意だが、やり直してきてもいいぞ。

「あやしいけど、君は度胸がなさそうだから、まっ、大丈夫かな」
安心されて、乱心しそうになる。

だいたい、命の恩人になり得た人物に対して、変態の容疑をかけるとは驚きだ。

それとも何か、そもそも他に心配する特別な理由でも、あるのだろうか。

「ところで、友達かなんかなんですか、お二人は？」

気になっていたことを尋ねる。

「親友かな」

「自称ですか？」

「了承されてまーす」

「親友料金とか毎月払ってるんすよね？」

「笑顔でもって支払ってまーす」

事務的な口調だ。

「お付き合いは長いんですか？」

「うーん、7年とんで半年かな」

あれ。

何か引っかった。

「お名前、もう一度いいですか？」

「アンジョリーナ・ジェリーです」

「お名前、もう一度いいですか？」

「九重だよ！何度も言わせんな！」

楽しそうにつっこみを入れてくるが、人類を二分するなら確実にあなたはボケでしょう。

「下の名前をよろしいですか？」

「卑猥ね」

「は？どういう解釈して」

「静。しずかとかいてせいね」

僕の取り乱した反論は取り合われず、ほとんどかぶせ気味で答えが返される。

同時に、数奇な、ことの運びを実感し、人生にある三つ目の坂の接近を感じる。

「…朝夷純をご存知ですか？」

「知ってるよ。近所に住んでる小学生の男の子。それが？」

近所に住んでいるおばちゃんみたいな認識だな。

「僕ですが」

「へうえ？」

難易度の高い発音で繰り出されるのは、やっぱりミラクル宇宙言語。女子高生の間で今春流行りまくっているのだ。

そんなわけあるかよ。

「僕が、朝夷純です。お久しぶりですね、静ね…静先輩」

こちらにも、年齢的に受け入れ困難な久しい呼び名が喉まで出てきた。

そして神様からの残念なお知らせだ。

女性が変わる。

納得せざるを得ない。

涼しい音が鳴った。

「マジ？」

「まじ」

手で口を覆って、ぱっちりおめめが限界まで開かれる。異常に細い眉も、おでこの敷地を侵略中。

少し自信が持てた瞬間だったかもしれない。

数年来会ってない相手二人に顔を合わせて、どちらにも一目では気付かれないのだ。もしかしたら、僕の外観は友人の評価を踏み倒して存外変貌しているのかもしれない。

一度目は、名前まで忘れられていたのが、ひっかかるんだけどさ。中身が腐ってきているので、腐敗臭がイメチェンを成就させたのかも。

「…あんまりかわってないのね」

小声で呟かれたなう。

出端はくじかれた。

「じゃあ、なんですかさっきの表情は…」

今、自身の顔がすごく疲弊している気がする。

「なんていうか、言われたらわかる感じ。小学六年生の純くんをそのまま高校一年生にしたって感じ」

成長過程でサイボーグにでもなっておけばよかったかな。

「そのままになりましたよいませんねー」

とりあえずロボットの真似しながら謝ってみた。

自己評価では、遺影になっていなくて安心してゐるんだけど。

九重静。対象年齢10歳以下のあだ名で12歳まで呼び続けていて、フルネームが印象に残っていなかったのだ。結先輩と同期の親友で、小学生の足で行けるくらいには近所。実質、三人で過ごしていた日常を、僕の熱烈な偏った好意によって二人と誤認させてしまいうくらい、存在感の薄いひとだった。わかりにくいなら、昼休みに一人でお絵描きしているような子、と言いかえよう。名前相応の、物静かで優しく、身体の弱い娘さんだった。

かといって、嫌いななんてことは無かったし、むしろ表に出さないだけで、僕にとっては魅力の多いお姉さんだった、のに。

反吐が出るくらい、そいつは過去形だ。

いったいどこでどう道を踏み間違えたのか？金髪はやり過ぎではないか？この学校は金髪が許されるのか？驚愕の文字が脳内を占拠する。

同姓同名の別人とか、そういう落ちを切望してしまった。しかし、なるほど。

これで月とすっぱん並みに表情を変換させる芸当の成り立ちがわかった気がする。

とってつけた様な快活さの裏で、おそらく本質的なところは変わっていないのだろう。

そうなるに至る、何か理由があるのか。それはもはや僕には関係ないんだけど。

「そっか、じゃあこれで三人が再会しちゃったわけだ」

僕の素性を知った後から、静先輩の態度は少しばかり落ちついた気がする。

今だって、本心から嬉しそうな顔を向けられてしまって、照れ隠しに寝転んだ椅子を直さざるを得ないじゃないか。

「でさ」

風鈴の音と重なる。

もう一度、白いカーテンが羽を広げるように踊った。

「純くんはさ、知ってるの？」

意識の隙間にメスを入れる様な慎重さで、理解に及ばないことを訊かれた。

「目的語が、無いですよ」

とりあえずの一言を返して目をやれば、九重静は何かを訴えてようとしている。

顎と視線で僕の後方を示した。

それが人なら、この部屋にはあと一人しかいない。

口には出せない何かを、暗黙の内に確認する仕草だった。

僕はわけがわからないまま、失態を侵さないように気を回し、無

言で否定を示しておいた。

食生活のことが思い出されても、ここではこうするのが最善だと思う。

今の七恵結については、僕は知らないことの方が圧倒的に多いはずだから。

「そっか」

そう言くと、すっかり名前がお似合いになった静先輩は、俯いて、「じゃあ」と言いかけ、唐突な物音を察知して勢いよく顔を上げた。一筆のように、煌びやかな線が縦に舞う。

「だふ！」

ベッドから、七恵結が落ちたんだな、と安易に予想した。

「ゆーんー！！！」

正解だったのを確認している僕の真横を、黄金のミサイルが通過した。

軌道上に石鹸の香りが残る。髪の毛いかな。

「やっぱ元気になり過ぎだろ、あの人」

向こうでは、カッターシャツを着崩した結先輩を、静先輩が抱き起こす。

「大丈夫？どこか怪我してない？」

事故に遭いかけた我が子を心配する母親のようだ。

二年前には全く予想もできなかった図。

「うわ！おでこ切れてるじゃん！早く保健室行かないと！」

それは既に手当て済みの傷です。そして、一体ここはどこなんだよ。

流行りの患者たらい回し運動会でもする気か。校内なら無意味に可能なので困る。

ひとりコントを遠目に眺めていれば、相方が目を開けて親友二人が向き合う。

静先輩が座ったまま七恵結をお姫様だっこしているふうな体勢。顔面が接近し過ぎて、目覚めのキスでも交わしそうなワンシーン。

唇と唇が、何かの拍子に触れ合いそうだ。

誰かさんはちよつと嫉妬して拳を握る。

チャンスはあつても、度胸はなかったかもな。先刻の静先輩の指摘が今頃、鳩尾みぞおちに一撃を叩きこもうとは。

何はともあれ、僕のことは忘れていても、二人の仲が崩れていなくて安心した。

僕が七恵結との関係を断つた二年前の三月十四日以降、同時に九重静との関係も疎遠だった。だから、二人がどうしていたかも知らずに、リバーシブル化に成功した静先輩にも気が付けなかった。

どうやら、七恵結は、他に誰も必要ないなんていいながら、親友との関係だけは捨て去らなかつたんだろう。

いい判断だし、いい親友だ。

「お邪魔かな」

漏らして、保健室を立ち去ろうとする。

僕を除く幼馴染の二人の関係は、あの頃とずっと変わらずに、きつと同じ時間が流れているのだ。

そこに僕がもう戻らなくとも、いや、むしろ戻らないことが、この日常を維持していくための最もシンプルなやりかただと思う。

「イラナイ」って言われちゃったしな」

皮肉を吐いても、今は以前と違う心持だ。

口元が緩んだかもしれない。

チリンチリン、と鈴の音。

三人はもう、別の道を歩み、僕だけちよつと遠いだけ。

保健室の扉を、そつと開いた。

ところが、予期せぬ事態が安心を劈つんざく。

「ごめんなさい、いつもいつも」

無理に立ちあがつて、一礼する結先輩を横目で見てしまった。

立ちくらみでおぼつかない足取りを見て、静先輩が肩を支える。

「気にしない！親友なんだから！」

どうしてか、笑顔で親友という言葉しつようを執拗に誇示する。

対して結先輩は不安げに、申し訳なさそうに「ごめんなさい、大丈夫です」とベッドに腰掛けた。

「意識が戻ってよかった！心配したんだぞ！」

大げさな声が室内に響き渡る。

「はい…」

親友、その言葉の意味を僕の意識は確認し始めた。

様々な親友を思い浮かべ、ひとつひとつと照らし合わせた。

「親友？」

それは他人と言った方がふさわしいのかもしれないやりとり。

昼ごろ、僕が七恵結に抱いた印象。

別人に成りかけた九重静。

他人行儀な七恵結。

変わらない僕。

その場に、妙な違和感と恐怖を感じて、数え切れない疑問が順番待ちを無視し、止まった意識を、右へ左へ、前へ後ろへと揺さぶる。「どういうことだよ」

強い風が、鈴を激しく躍らせた。

声を張り上げて、安心させようと不格好になる人。

ぎこちない作り笑いで、必死に相手に合わせようとする人。

それは、僕の知っている二人ではない。

あの頃は、

「違う、あの頃は」

こうじゃなかった。

風鈴は割れそうなほどに、がちやがちやと雑音を絶やさない。

風が窓を叩き始める。

七恵結はこちらに目を向けた。

「あなたはたしか…」そんな顔で僕を見る。

静先輩がそれに気づいて僕に目で合図を送った。

でも僕は、その真意を推し量れない。伝わらない。

ドアが開いて、保険医が戻ってきた。

「もう入っていいかー？」

場違いな中年男性の軽い声。

「先生！七恵さん起きました！あとお願いしますね！」

元気よく、というよりは半ば怒鳴りつけるように、必要以上の声量が発せられる。

こちらに向かいながら「また来るね！」と七恵結に手を振った。

遅れて、気遣うように彼女が手を振り返す頃には、静先輩は僕の目前まで迫っていた。

そして僕の手をとり、大柄な保険医の横を通り、廊下を走りだす。引きずられるように走る僕は、静先輩の名前を呼ぼうとした。

先ほど言いかけた内容を問いただしたくて仕方なかった。

七恵結に何が起こったのか。彼女との間に何があったのか。

流れる優美な金色こんじきの中で、瞳で笑い、口だけ泣き出しそうな、そんな物静かな幼馴染の姿を見たのだった。

（後書き）

ありがとうございます！

改稿するからとか甘えて申し訳ない！

でもお話的にはきちんと書いたつもりです！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9264u/>

ハナノナノ（未定） 2

2011年7月30日03時23分発行